

海外林業研究会々員の広場

嫌われても国際協力（12） 生物多様性のための植林・林業（続）

筆者はいわゆる環境植林が嫌いである。環境植林をしたいと筆者のところに相談に来た方には、その方の「環境植林」の「環境とは何を意味するのか？」を問いかけることにしている。問いつめていくと、結局のところ「木を植えることは環境に良い」という思い込みで、「木を植えたい」だけであることが多い。「環境植林」をするならするで、どのような環境を形成しようとするかを明確にしないと、環境に予期せぬ悪影響を及ぼす危険がある。前回の「生物多様性のための植林・林業」に対して、複数の読者からいくつかの意見が寄せられた。今回はそれに対する筆者の考えを紹介させていただく。

アカシアマンギウム産業植林地について

意見：アカシアマンギウム植林地でも、在来植物にとってはアランアラン草原よりマシな生息地ではないか？ 草原から森林へと植生を回復するための植栽活動もあるのではないか？

筆者の考え：生産目的で早生樹種が植栽される場所では、数年周期で伐採と再植林が繰り返されるため、在来植物の生息地とはなりえない。草原から森林へと植生を回復させることの目的に生物多様性の回復をも含めるのなら、たとえ生長速度が速くても外来樹種の導入は避けるべきである。

フタバガキ科樹木の植栽について

意見：マレーシア森林研究所の裏山にある50年を超えるカプール植林地では、大型獣はいないものの哺乳類の多様性はそこそこ高い。また数年に一度しか開花・結実しないため、フタバガキ科植物は動物の常食としての価値は低いという説もあるが、樹上性の哺乳類の生息の場として重要であると考えている。

筆者の考え：林冠が閉鎖した植林地が、樹上性もしくは小型の哺乳類の生息場所になりうることは認める。ただし樹上性の哺乳類の生息地を作るための植林ならば、フタバガキ科にこだわる必要はないだろう。

地域に自生する樹種を密植する事について

意見：天然林や二次林では種子から稚樹の間の死亡率がかなり高いため、その生育段階で採集は許されるべきではないか？

筆者の考え：たとえばヘクタール1万本の密植を100ヘクタールで実施するには100万本の苗木を用意する必要がある。実生や稚樹の大半は林内で枯死するからと、大勢の人が森に入り山出し苗を採集すると林床は踏み荒らされ掘り散らかされる。もしまとまった数の苗木を採集できる森林が残存しているなら、荒地に植栽して育つのを待つよりもそのような森林を保全するのが先決と考える。（小面積の土地にその地域に自生する樹種を密植して公園を作ることを否定している訳ではない。）

植林を含む国際協力においては、サラ金の広告が繰り返しているように「計画を事前にしっかり検討すること」が大切なのである。（藤間 剛）